

編集後記

本学技術センター研修会は今回の平成 24 年度（第 9 回）より、参加の利便性を考慮して午後半日での開催に短縮されましたが、前年に続き専門性の高い各技術分野における口頭発表が行われ、充実した研修会であったように思います。その基調講演では、大学院理学研究科の坂口綾助教（当時；現准教授）より、人工放射性ウラン同位体の地球科学的利用についてご講演頂きましたが、このウラン同位体が、新たな海洋トレーサーとしての確立（平和的利用）を目指して研究が進められていることは、大変興味深く感じました。

また、東日本大震災による福島原発事故の発生以降、本学でも様々な支援活動が行われていますが、そこには当技術センターの職員も協力しており、スクリーニングなどの重要業務の支援をしています。その詳細は、本報告集掲載の口頭発表報告（菅慎治技術班長、笹谷晋吾技術主任）の通りですが、特に被災者の方々に対する支援がなされていることに関しては、同じ職員としても胸を熱くする思いです。

さらに本報告集では、瀬戸内圏フィールド科学教育研究センターの紹介と技術職員への期待について、前田照夫同センター長よりご寄稿頂きました。前田先生ならびに本報告集のために上記研修会基調講演の原稿をご執筆頂いた坂口先生には、ここに重ねて御礼申し上げます。

そして、本報告集で特筆すべきは、何と云っても勇木義則技術統括のこれまでの実績です。隠岐出身でタフな勇木統括はその持ち前の行動力（積極性と折衝能力）で技術センター創設期より、藤久保昌彦初代技術センター長（現阪大教授）、向井一夫前技術統括と共に中心になって、学内での技術職員組織の確立に尽力され、その取り組みを他大学等技術職員の方々へ積極的に PR するために奔走されました。また、勇木統括は長年にわたり、現在の情報メディア教育研究センターにおいて様々な業務に携わってこられた上に、情報処理センター等担当者技術研究会や中国・四国地区国立大学法人等技術職員代表者会議では幹事役も務められました。振り返れば、今ある当技術センター職員同士のつながりは、この方抜きには無かったのかもしれませんが。このような輝かしい足跡を残した勇木統括も、平成 25 年 3 月で定年を迎えられ、統括は退任（常勤職員としては退職）されました。しかし、ご健在であることに全く変わり無く、今春からは瀬戸内圏フィールド科学教育研究センター竹原ステーション（水産実験所）において契約技術職員（非常勤職員）として、新しいことに果敢にチャレンジしておられます。勇木統括には、これまで大変お世話になりました。（まだこれからも引き続きお世話になりますが、）改めて御礼申し上げます。

当技術センターは、平成 25 年度で設立 10 年目を迎えます。勇木統括が掲げた「豊富な経験に基づくオンリーワンの技術職員」が集う組織を目指し、今後のさらなる発展を祈念して筆を置くこととさせていただきます。最後に、山本陽介技術センター長、村上義博技術副統括（当時；現技術統括）、学術・社会産学連携室学術支援グループ（総務担当）の桑原健主査、映像作成（編集）に関する興味深い技術報告をご執筆頂いた北川和英技術専門職員をはじめ、本報告集の発行にご協力頂いた技術センター構成員の皆様にも、深く感謝いたします。

平成 24 年度技術センター報告集編集 WG

委員長	三原 修	(共通機器部門)
副委員長	畠山 照彦	(医学系部門)
委員	坂下 英樹	(共通機器部門)
	積山 嘉昌	(フィールド科学系部門)
	平松 正太郎	(工作部門)
	桂 由香理	(医学系部門)